

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

熊田 圭太

【所属】（助成決定時）

同志社大学大学院

【研究題目】

帝国日本の国際貢献

【研究の目的】（400字程度）

本研究では、スイスの国際連合ヨーロッパ本部に保存されている国際連盟時代の一次資料を用いて、第一次世界大戦後における日本の国際貢献の実態を解明する。そして、国際秩序の変動のなかで帝国主義的な思想がいかに変容・展開したか、近代日本の国際社会への「貢献」という視点から捉える。その理由は、世界的な戦争違法化とデモクラシーの潮流を背景にもつ人道的な支援こそが、かえって「援助する側」と「援助される側」といった新たな支配の構造を生産したと考えられるためである。

本研究により、国際連盟における帝国日本の国際貢献の実態とその思想的意義が明らかとなるため、従来の研究の欠落が補完されるとともに、新たな側面が照射されることとなる。また多数の在外資料が収集されるため、知的文化財収集の観点からしても極めて有益である。こうした資料の収集と分析が行われることで、今後多くの研究者によるそれらの利用が可能となるのみならず、世界の研究者との共同研究や学術交流による国際的研究を促進するという波及効果をももたらすことができる。

【研究の内容・方法】（800字程度）

第一次世界大戦後の日本の国際貢献の実態を捉えるために、本研究では分析の対象として、近代日本を代表する国際派知識人である新渡戸稲造（1862-1933）を中心に取り上げる。新渡戸は1920年から1926年まで国際連盟の事務局次長兼国際部部長を務めたが、その活動の詳細は未だ明らかとなっていない。資料の存在自体は先行の研究者によって示唆されてはきたものの、残存する資料が複雑雑多であるのに加え、地理的・言語的な制約も手伝って、体系的な調査・研究は十分に行われていないのが現状である。そこでまず、申請者は国際連合ヨーロッパ本部に保存されている関係資料を網羅的に調査する。そのうえで帰国ののち年度別・内容別に整理し、国際連盟職員としての新渡戸の全体像を浮かび上がらせるとともに、彼の具体的な活動実態を解明する。

新渡戸に着目する理由は、第一に、石井菊次郎（1866-1945）や安達峰一郎（1869-1934）といった外交官とは異なり、日本で最初の国際公務員として国家から独立した中立的な姿勢が求められたため、その分その言動には国際貢献と国益との葛藤がより強く投影されていると思われるからである。第二に、新渡戸自身は必ずしも帝国日本の政策決定に影響を及ぼさう立場にいたわけではないが、間接的ではあれ彼の教え子を介して、国際貢献をめぐる戦後日本の政治的潮流をも見通すことが可能と考えたためである。そして第三に、新渡戸は国際人であると同時に、植民政策学の先駆者であったためである。植民政策学は今日の国際関係学や開発経済学の前史であることはすでに指摘されているが、おそらくそのことは「国際貢献」という言葉の持つ多義性と無関係ではない。新渡戸の人道的な言動と植民思想との内的連関を明らかにすることは、帝国日本の国際貢献の実相をも解明することにも繋がる。

【結論・考察】（４００字程度）

蒐集した資料群をテーマごとに細かく分類したところ、国際連盟の事務方幹部として新渡戸稲造が関与した案件は多岐にわたり、しかも領土問題や紛争の処理といった政治的軍事的案件よりは文化的、社会的案件が多いことがわかった。今回の調査で確認し得た資料はほんの一部に過ぎないが、これまで新渡戸の主要な業績とされてきた「知的協力国際委員会」の創設と運営のほか、教育や衛生、宗教の問題など、様々な業務に携わっていたことが明らかとなった。

また、従来、新渡戸はフィンランドとスウェーデン間の領土問題を解決したとされてきたが、今回の調査では通説を裏付けるような資料をまったく発見することができなかった。本研究は、通説の正否を含め、「国際人」たる新渡戸の再検討を促すものとなろう。

資料を時系列に従って整理すれば、新渡戸のもとには日々いくつもの業務が舞い込んでいたことがわかる。具体的な内容については今後の分析によって明らかになるが、こうした種々雑多な資料の存在自体が既に国際貢献の選択肢が軍事介入や経済援助のみならず多様にあり得ることを示唆している。「国際人」の実態は、こうした業務を我慢強くこなす姿勢にこそ見ることができるのである。